

○松橋有子* 清水凡生* 小林京子** 三山真紀*³(*広島大, **広島大附属高, *³県立賀茂高)

目的 同胞が一人か一人っ子という家族形態のなかで、思春期の人達が小さな子ども達とふれあう機会ほとんどない。そこで考え出されたのがふれあい体験学習で、これを家庭科の保育の実習としている実例を示し、さらに広める可能性について検討したい。

方法 対象は高校2年生221名(男子138名, 女子83名)で、ふれあい体験は保育所(0-5歳児)において、1995年夏期休暇前後の2回行なわれた。高校生には手作りおもちゃ作成が休暇中の宿題としてだされた。体験前と後にアンケート調査を実施し両者を比較した。

結果 ①高校生の約半数は乳幼児を世話した経験が一度もなく、約20%は遊んだ経験すらなかった。②1回目に子どもたちとの交流の場に入り難かった者も、自分の作ったおもちゃを通して仲良くなることができた。③乳幼児を育てることについて、(a)めんどろ・忙しい・苦しいと答えた者が体験前は42%、体験後は37%であった。(b)おもしろい・楽しい・すばらしい・幸せと答えた者は体験前は35%、体験後は53%に増加していた。④親が子どもを育てることについて、(a)親の責任で当然と答えた者が体験前は48%、体験後は41%であった。(b)すばらしいことと答えた者は体験前29%、体験後35%に変化していた。

結論 実際に子どもと接する体験学習は効果的で、保育の実習として適していると考えられるが、1学年の級数が多い場合1~2名の家庭科教師では実施は極めて困難である。